古民家だより

No. 25
令和２年（2020 年）11 月５日（木）
越谷市教育委員会　生涯学習課

北国や高い山からは初雪の便りが届くようになりました。すでに水が落とされている瓦曽根溜井の水たまりでは、小魚をつつく鷺の姿も見られます。

眼と耳で学んだ　小学生の社会科見学

今年度初めての古民家社会科見学が大間野町旧中村家住宅で行われました。市立北越谷小学校４年生です。あいにくの雨天のために民具の体験活動はできませんでしたが、施設の見学と水害の学習を熱心にしていきました。今回も小学生の素晴らしい感性を見せてくれました。その一端を、児童のつぶやきからご紹介しましょう。

「コンクリート・・・・かなぁ？」

土間に案内したところで職員が「この床は何でできていると思う？」と尋ねると、何人かが「コンクリート」と答えましたが、中には「コンクリート・・・かなぁ？」と言い淀んでいる子もいました。この背後には（ちょっと感じが違うかも）という気持ちがあります。時間があれば、その気持ちを聞きたかったところです。職員が粘土とニガリや石灰を混ぜてたたいて造った床であることを話すと、不思議そうな顔で聴いている児童もいました。

「金庫みたいだ！」

壁や扉が分厚い土蔵を見て、「金庫みたいだ！」と言った児童がいました。以前、「シェルターだ」と言った小学生がいましたが、共に土蔵の本質を表している言葉ですね。中に恐る恐る入った児童たちは、窓が小さく少ないことや階段がタンスのようになっていて（箱階段）収納場所を工夫していることに気づきました。

見かけなくなったもの　失われつつある言葉

一方、児童の皆さんを案内する中で、生活の中から失われつつある言葉もあることを改めて認識しました。それは土間の上部、太い梁で黒く光っている煤（すす）について職員が話した時でした。皆一様に怪訝（けげん）そうな顔つきだったのです。そこに助け舟を出してくださったのが引率の先生でした。先生が「マックロクロスケだよ。」とおっしゃると、児童たちは顔をほころばせ、少しイメージが湧いた様子でした。

古民家で生活が営まれていた頃、竈（かまど）や囲炉裏（いろり）、風呂釜などで薪（まき）を燃やしました。神棚では灯明（とうみょう）、仏壇ではろうそくや線香、照明には石油ランプが用いられました。そういう場所にはそれぞれの神様を祀って一家の健康と繁栄を祈り、また火の用心を心掛けながら煤の始末も定期的に行われました。煤はやっかいなものですが、木造建築物、特に茅葺（かやぶき）家屋では虫食いや雨漏りを防ぐものにもなっていました。

日常的に火を使うことが非常に少なくなった現代、煤を見ることもあまりありません。それと共に煤という言葉も普段使うことが少なくなりました。このような言葉が他にもあります。

◆**箍（たが）が外（はず）れている**・・・「緊張感がなく、しまりのない状態」という意味はわかっていても、現在“箍”を見かけることはあまりないので、その本来の形状が次第に知られなくなってきました。

◆**○○さんは一家の大黒柱**・・・大抵は大戸口から土間に入った所の正面近くに立っています。主屋（おもや）のほぼ中央部にある最も太い柱で屋根を支える要なので、このように表現されています。現代住宅でどの柱も均一であることが多いので、どれかが大黒柱という構造ではないようです。

◆**二度とうちの敷居（しきい）をまたがせない**・・・ある人に対して家には絶対入れないという強い気持ちを表した言葉です。敷居は戸の下部に設えられる部材ですが、小中学生は「レール」と呼ぶことが多いようです。土間に入る大戸口

（住人の普段の出入口）の敷居は出入りの頻度が多く、また重い大戸を支えるので他よりも太く頑丈です。そして“またぐ”は敷居を踏みつけて出入りしてはいけないことを表しています。

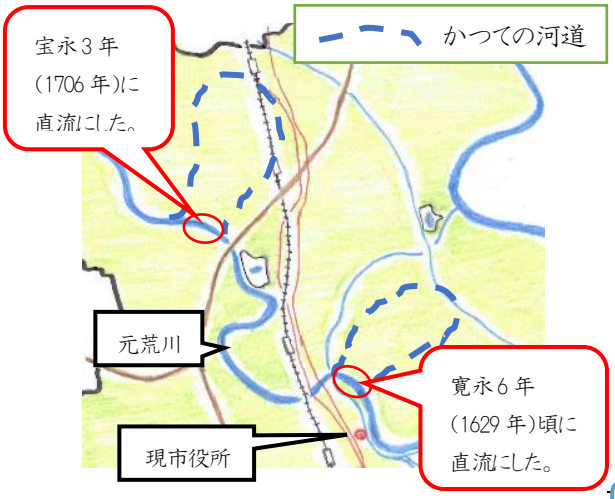
川と闘い川を治めてきた先人達

市域の河川からは古来多くの恵みを授かってきましたが、川との格闘もありました。今回の社会科見学では水害の勉強も含まれていました。すでに学校でその事前学習をしてきた北越谷小学校 4 年生たちはそれに関する実際の史料を見て、改めてその様子に関心を寄せていました。史料の持つ力なのでしょう。それは次のような場面でした。

★土間上部の屋根裏スペースに気づいた時・・・普段から米と味噌が蓄えられていて、災害に備えられていました。

★土蔵の床が主屋の床よりも１mあまり高いことがわかった時・・・当家は地域の行政の中心でもあったので、重要な書類や家具などを格納し、住人が避難する場所でもあったのです。場所によっては土蔵の敷地を主屋よりも一段高く土盛りした設備（水塚（みづか））の家も、県東部には多いです。

★民家に備えられた舟を見た時・・・職員が何のための舟か尋ねた時は「釣りに使う？」と答えていましたが、水害時に避難に使うことを聞いて浸水の様子を直に感じ取ったようです。



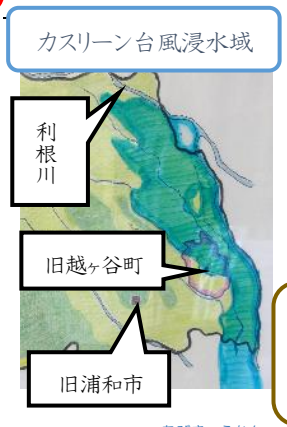
曲流を直流に　近世の治水

江戸時代初頭までは関東の二大河川、荒川と利根川が流れていたこの地域です。近世に入ってからこの河川の付け替え工事が行われて今の流路になりました。「元荒川」、「古利根川」はその名残です。当地は川による大きな恵みを得てきましたが、水害も多くありました。天候が回復してもなかなか水が引かないことが度々でした。そこで曲がりくねった河道を真っ直ぐにする工事が、江戸時代の初期と中期に行われました。（「越谷市史一」及び「三」）

現代になっても度々洪水

市域の古老の方々が時々お話しくださるのが昭和 22 年（1947 年）のカスリーン台風です。9 月 15 日に房総半島南端を通過して日付が変わった午前 0 時 25 分、旧大利根町（現在の加須市）付近で利根川の堤防が決壊しました。当時の桜井村の人が次のように証言しています。

16 日、「水が出た！」という叫び、半鐘（はんしょう）（急な出来事を告げる鐘。火の見やぐらなどに設置されていた）の音、人も車も東に西に走り回った。古利根川の水は午後９時にはわが村を襲ってきた。見る見るうちに濁流は家の中に流れ込んだ。避難する住民は阿鼻叫喚（あびきょうかん）（地獄で泣き叫ぶ様子）の状態・・・（「昭和 22 年　埼玉県水害誌」所収。現代文に直してあります。）



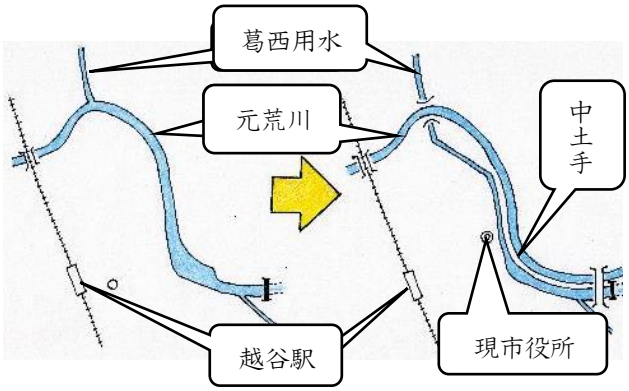
カスリーン台風直後の様子
橋脚が見えず、橋げたのすぐ下まで水が来ています。水は土手を越えて住宅の中に入っています。

近年の治水

その後も浸水が起こりましたので、更に大きな治水事業が行われ、浸水は少なくなっています。

（１）葛西用水と元荒川の分離

昭和 40 年（1965 年）頃、葛西用水を元荒川から分離して立体交差にしました。（伏越（ふせこし）と言います）

（２）調整池の造営

平成 2 年（1990 年）に「大吉調節池」を、平成 20 年（2008 年）に「大相模調節池」が造られました。